サンフロント21 懇話会

〒410 沼津市魚町1番地
-8560 サンフロント5F
静岡新聞社・静岡放送
東部総局内
事務局
TEL 055・962・6520

2016.1.27 No.106

協力／井草呉服店

静岡新聞社 社長

大石　剛

新年あけましておめでとうございます。今年はスタートから北朝鮮の核実験、サウジアラビアとイランの国交断絶など世界情勢は、波乱含みの年明けとなりました。金融・資本市場も地政学リスクと新興国経済への懸念に揺さぶられています。会員の皆さまの決意、今年の展望は厳しさを増しているのではないかとご推察いたします。

昨年は、7月に伊豆の国市の韮山反射炉が世界遺産に登録され、12月には東京五輪・自転車競技（トラックとマウンテンバイク）の伊豆市開催が決定しました。東部地域の魅力を世界に発信する、飛躍の礎を築く節目の年となりました。

一方で、地域活性化構想を実現する難しさを再認識した年でもありました。伊豆半島ジオパークの世界ジオパーク認定の先送り、そして当懇話会が20周年記念事業に位置付けた「人と動物の未来センター」建設の行き詰まりです。しかし、この二つは地域活性化に強いインパクトを与える事業です。当懇話会は今年を再スタートの年とし、実現に向けた活動を展開していく所存です。引き続き、会員の皆さまの温かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。

サンフロント21懇話会代表幹事
スルガ銀行 社長

岡野光喜

新しい年を迎え、会員の皆さまに心よりお慶びを申し上げます。

サンフロント21懇話会は今年、発足から22年目を迎えます。これまでにも増して東部地域の活性化に貢献し、存在感を高める飛躍の年にしましょう。世界遺産に登録された富士山や韮山の反射炉をはじめ、東部地域が誇る世界レベルの資源を活用し、世界に発信していく役割の一端を当懇話会が担っていると考えています。

昨年末には2020年、東京五輪・自転車競技の伊豆市での開催が決まりました。喜ばしい限りです。スポーツを軸に据えた地域づくり・産業創出は、今後ますます重要性を増していくと思われます。伊豆市がその先駆けとなり、それが東部地域全体に波及し発展していくため、これまで以上に実効性のある提言活動に取り組みたいと思います。

国内外の社会、経済情勢は時々刻々と変化しています。そうした中で、他地域との競争に競り勝つには、地に足の着いた活動をベースとしながらも、柔軟で独自性にあふれた、ユニークな発想と行動力が求められています。今年も会員の皆さまのさらなる結束と一層のご支援をお願いする次第です。

新年のご挨拶

静岡県知事
川勝　平太

明けましておめでとうございます。

昨年の夏、韮山反射炉が世界遺産に登録されました。平成25年に富士山が世界遺産に登録されるや、茶草場の世界農業遺産、世界一の健康寿命など、静岡県は世界クラスの地域資源の数が、過去2年半で、なんと23件にも増えました。まさに「世界に羽ばたく“ふじのくに”」の立ち姿が現れてきました。

東京への人口集中が進む一方で、東京の合計特殊出生率は全国最低です。今や東京は日本の人口減少を加速させています。それゆえ「ポスト東京時代」を開く地方創生は日本の最大の課題です。その課題に向けて各界各層の皆様に参画いただき、英知を結集した「美しい“ふじのくに”まち・ひと・しごと創生長期人口ビジョン」と「総合戦略」を昨年10月に策定しました。子供を2人以上持ちたいという若い世代の希望や、本県で働き、住みたいという希望の実現に向け、「美しく、強く、しなやかな『静岡型』の地方創生」をとおして「ふじのくに」づくりを推進してまいります。

昨年の秋、イギリスでのラグビーワールドカップでは日本代表とりわけ静岡県選手が大活躍しました。2019年の日本大会は袋井市のエコパスタジアムが会場の一つです。つづく2020年の東京五輪では自転車競技の会場に伊豆市が選ばれました。ワールドカップと東京五輪を控えたこれからの数年は本県を世界にアピールする絶好の機会です。台湾のバトミントン選手の合宿は大成功でした。また、モンゴルのレスリング選手団と柔道選手団の事前キャンプがそれぞれ焼津市と伊豆の国市で行われます。スポーツを通じた交流は静岡県民が世界に羽ばたく重要な土台になります。

富士山静岡空港は、海外交流に重要な役割を果たしています。これまでも外国人の乗降客数では地方が管理する空港として全国一でしたが、さらに昨年は国際線の新規就航が急増しました。空の玄関口である本県の空港の一層の充実を図るため、本年も引き続きソフト、ハードの両面で整備を進めます。

今年は、明治9年（1876年）に静岡県・足柄県・浜松県が統合されて現在の静岡県が生まれて140周年目に当たります。先人の遺徳をしのび、世界の人々を惹きつけ、世界に羽ばたく“ふじのくに”静岡県の魅力を高め、日本のシンボルである「富士山」の品格ある姿に恥じない「富国有徳の理想郷」を築くべく、全力で取り組んでまいります。皆様の御理解と御協力をお願い申し上げます。

沼津市長
栗原　裕康

新年あけましておめでとうございます。

平成28年の年頭にあたり、謹んで新年のお慶びを申し上げます。

ここ数年、市政におけるまちづくりの方向性を「県東部で一番都市的魅力に溢れたまち」にすると定め、民間有志の皆様と協働で様々な事業を行って参りました。

そんな中、昨年1月、沼津駅周辺総合整備事業の中核をなす鉄道高架事業が、事業主体である県より従来どおり推進するという方針が正式に示されました。このことにより将来、高架下、車両基地跡地、貨物駅跡地という沼津市中心市街地の一等地を都市的魅力に溢れたまちづくりに活用できることとなります。

また、昨年は市民による「自分たちの力で沼津を元気にしよう」という様々な活動がより多岐にわたり展開され、週末、沼津の中心市街地へ行くと、必ず何か面白いことがあり、賑わいに満ちているという理想に近づいてきていると感じます。ただ、地元の人たちが、これは素晴らしいと自信を持って推奨するものが、外から来た観光客等にはそれほど受け入れられなかったり、逆に我々にとって当たり前で見過ごしていたものが好評だったりということがままあります。その点はしっかりと留意していかなければなりません。

また、市役所や民間が考え実行している事業やサービスを、市民が知らないという事態が往々にしてあります。市民の皆様から市役所は宣伝が下手だとよくお叱りを受けますが、これだけITが発達し、様々な情報伝達手段が出てくると我々の広報の仕方も更なる工夫が必要となります。

最近、外国からの観光客が全国的に増加していますが、ここ沼津でも中国からの団体客が商店街を散策する姿も見られるようになってきました。旅行者のインバウンド需要は東京オリンピックに向け、これからますます増加していくことでしょうから、市としても受け入れ態勢を整えなければと考えております。

そして、今更申すまでもなく市政の基本は市民福祉の維持向上です。高齢化社会の進行、少子化も深刻ですが、行政として出来るだけのことは努力して参ります。そのための政策の方向性は、賑わいに溢れ都会的な魅力に満ちたまちづくりにより沼津が元気になることです。

皆様の引き続きのご支援とご協力をお願いするとともに、今年一年のご多幸を心よりお祈りし新年のご挨拶と致します。

われら申年生まれ

2016年（平成28年）は、十二支（じゅうにし）と十干（じっかん）を組み合わせた、本来の干支（えと）でいうと「丙申（ひのえ・さる）」になります。前回の丙申は60年前の1956年（昭和31年）。日本は神武景気により、戦後の経済水準を超えるまでに回復し、流行語となった「もはや戦後ではない」が経済白書に記載された年でした。

申年は「魔が去る（申）」年ということで良い年になるといわれています。そして申年生まれの人は、意志が強く、賢くて好奇心が旺盛で個性的とされ、行動が素早いといわれます。人を引き付ける話術で仲間や組織を巧みにつくるなど、多様な魅力の持ち主です。

良いことづくめの申年にあやかり、今年がサンフロント21懇話会の会員の皆様にとって良い年となりますよう祈念し、申年生まれの方々に、新年への期待や抱負を寄せていただきました。

株式会社大野商店
代表取締役会長
大野　数芳
昭和7年1月13日生まれ

新年あけましておめでとうございます。

戦前、戦中、戦後を駈け抜けて年男の７回目を迎えました。時代の変化は激しかったですが、近くにある柿田川の湧水を見ていると飽きないし、子供の頃と変わらず不変ですばらしい。本年も健康に注意しながら、湧水のように黙々（見ざる・聞かざる・言わざる）と社会に奉仕をしていきたいと思います。

足立会計事務所
所長
足立　吉松
昭和7年3月9日生まれ

新年あけましておめでとうございます。７回目の年男、開業して48年目、高校の恩師が婚礼の時の祝電に「土地にほれ、女房にほれて、その上に仕事にほれる人は幸せ」の３ぼれを胸に、そして神仏の加護を感謝しつつ、今年も微力ですが、更生保護の関係と日赤のサポーターを通して平和な明るい社会の実現に頑張るつもりです。

伊豆の国市長
小野　登志子
昭和19年4月20日生まれ

新年あけましておめでとうございます。昨年は、伊豆の国市にとって素晴らしい年でありました。韮山反射炉が世界文化遺産に登録され「世界遺産のあるまち」になりました。本年４月には市長就任4年目を迎えます。これからも皆様のお力添えをいただきながら、本市の魅力を市内外へ発信できるよう努めてまいります。

沼津市商工会
会長
大村　保二
昭和19年5月30日生まれ

あけましておめでとうございます。干支の組合せの21番目である甲申（きのえさる、こうしん）の生まれで、６回目の年男を迎えることができ、これまで支えてくれた多くの皆様に感謝を申し上げます。

今年もお世話になっている皆様に少しでもご恩返しができればと、地元地域の活性化に尽力してまいります。

ホテル沼津キャッスル
代表取締役
三輪　俊城
昭和19年10月27日生まれ

新年あけましておめでとうございます。

サンフロント21懇話会様には毎年会場としてお使いいただき、ありがたく感謝しております。

さて昨年は、実需に対して大幅に超過している沼津のホテル事情を心配していましたところ、流行語大賞にもノミネートされたインバウンドにより、なんとか救われた感がありました。今年はどうなることやら…ただただ世界の平和を祈るばかりです。

株式会社東興
代表取締役
山内　倭子
昭和19年12月生まれ

６回目の年女を迎え、また起業して39年目に向かわんとしております。ここまでこれたのも私を囲む皆様方の支えがあってこそと感謝申し上げる次第です。「申は伸なり」とあり、真っ直ぐに伸ばすという意味でもあるそうです。本年も少しでも発展できるよう努力してまいります。

静岡県富士農林事務所
所長
竹林　圭介
昭和31年1月4日生まれ

日本ＩＢＭの会長を務めた北城恪太郎さんのモットーとして有名な「あたまで仕事をしよう」という言葉に昨年出会いました。「あたま」とは、あかるく、たのしく、まえむきに、の頭文字です。一月四日に60歳の還暦を迎え、何か二巡目の人生が始まったような気がします。二巡目の人生は「あたまで生きよう」で行きたいと思っております。

日本製紙株式会社
執行役員富士工場長
音羽　　徹
昭和31年1月11日生まれ

あけましておめでとうございます。

早いもので新年早々に還暦を迎えます。皆様方、そして家族の温かい力添えで無事迎えられます事に大変感謝しております。

紙のまち・富士市が更に明るく元気になる様、微力ながら『和を保ち、楽に楽しく、技を使い』頑張っていきたいと考えています。

株式会社三島新聞堂
代表取締役
渡辺　幸一郎
昭和31年1月15日生まれ

新年明けましておめでとうございます。早いもので、還暦を迎えます。これまで多くの方にご指導をいただいていることに感謝申し上げます。今年は今迄皆さまに教えていただいたことを参考に、

お客様のニーズにお応えできる会社作りを進めてゆく所存です。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

静岡放送株式会社
ラジオ局長
漆畑　昌宏
昭和31年2月26日生まれ

新年あけましておめでとうございます。早いもので今年還暦を迎えます。出身地が愛知県豊川市という事もあり、毎年初詣には豊川稲荷に足を運びます。還暦は、男の厄年とも重なります。皆様のご多幸もあわせて、例年以上に心を込めてお参りしようと思います。本年も宜しくお願いいたします。

静岡県東部危機管理局
局長
佐藤　一彦
昭和31年3月29日生まれ

あけましておめでとうございます。
ここまで支えていただきました皆様に感謝申しあげます。

今年の干支であります丙申のように、外見も内心も燃えるように今年一年頑張っていきたいと考えております。

ただ、災害だけは起きないことが何よりです。万が一起こった場合には、すぐに災害が申年になるよう願っています。

木内建設株式会社沼津支店
支店長
小堀　信行
昭和31年4月2日生まれ

『明けましておめでとうございます。早いもので今年還暦を迎えます。今日まで支えてくださった皆様に感謝の気持ちで一杯です。今年は昨年来から続いている偽装問題での建設業への不信感が『去る(申る)』よう信頼回復のため、妻からの贈物の赤い下着を身に纏い、努力・行動して行きます。もちろん趣味のゴルフも頑張ります。』

静岡県賀茂健康福祉センター
所長
髙橋　安雄
昭和31年9月19日生まれ

動物園で木から木へとピョンピョン飛び回る。それがサルのイメージ。

今年は、還暦。若い頃の「還暦」は、随分先の話でした。

賀茂地域は、東海岸で朝日を拝み、西海岸で夕日に感謝。面白い場所です。

座して時を待たず、新たな地域課題に向かって、木から木へとチャレンジの一年にしたいものです。

株式会社佐藤建設
常務取締役
佐藤　宗德
昭和43年4月27日生まれ

新年明けましておめでとうございます。今年、48歳、人生４回目の年男を迎えました。

本来、申年の「申」には「伸ばす」という意味があり、草木がどんどん成熟していく様子を表すそうです。これにあやかり、私も公私ともにどんどん伸び、成長し、大きな実をつける一年にしていきたいと思います。皆様におかれましても本年が実りある一年でありますよう祈念申し上げます。

◎与野党、夏決戦へ攻防 改憲勢力3分の2焦点

共同通信社 政治部長

小渕　敏郎

2016年の政局は、７月10日投開票が有力視される参院選に向けて与野党がしのぎを削る展開となる。安倍晋三首相は「経済最優先」を前面に掲げるとともに、５月末の伊勢志摩サミットで政権浮揚を図り、参院で27年ぶりとなる自民党の単独過半数を狙う。与党やおおさか維新の会などの改憲勢力が発議に必要な定数３分の２に達するかも焦点。民主党は、野党共倒れを防ごうと改選１人区での統一候補擁立に力点を置く。永田町では「衆参同日選」の可能性も取り沙汰され、波乱含みの攻防が繰り広げられそうだ。

首相にとって、15年度補正予算を１月中旬に処理した上で、16年度予算を年度内に成立させるのが当面の目標。この後は環太平洋連携協定（ＴＰＰ）の承認案と関連法案の審議を通じ、生産者の不安払拭（ふっしょく）に全力を挙げる。サミットではテロ対策や北朝鮮の核実験対応を議題に安倍外交をアピールしたい考え。参院選前の日本での日中韓首脳会談や、ロシアのプーチン大統領来日の実現も模索している。民主党は、国会論戦で３万円の臨時交付金に関し「選挙目当てのばらまきだ」と指弾。軽減税率の財源問題や、高木毅復興相の香典支出を徹底追及することで、政権にダメージを与える戦略を描く。

衆参同日選の可能性が指摘されるのは、17年４月に予定される消費税再増税後では景気が冷え込み衆院解散を打ちにくくなるとの見方があるためだ。ただ、公明党は同日選には慎重対応を求めている。首相は大型連休明けにも野党の選挙準備などを見極めて最終判断するとみられる。

安倍１強打破を目指す民主党は、野党結集への態勢づくりを急ぐ。岡田克也代表は維新の党との新党結成の可否を３月までに判断する意向。参院選の前哨戦となる４月の衆院北海道５区補選は、共産党を含めた野党勢がスクラムを組めるかどうかの試金石となる。

◎米利上げ、原油安、地政学リスクで波乱含み

時事通信社 経済部長

佐藤　　亮

2016年の内外経済を展望する上でキーワードは、「米利上げ」、「原油安」、「地政学リスク」の３つに集約されるだろう。

米国は昨年末、９年半ぶりの利上げに踏み切った。世界で最も影響力を持つ米国の金融政策変更は、内外の金融・資本市場にとって重大な出来事といえる。新興国に流れていた資金が逆流し、これまで世界経済のけん引役だった新興国の経済減速をさらに加速させる可能性がある。中国経済も２桁成長から６％台へと成長鈍化が鮮明だ。米国は今年中に年３～４回程度の利上げを行うとみられているが、対応を一歩でも間違えば内外市場が大きく動揺する危険性がある。

歴史的な原油安の影響も読み切れない。日本にとっては燃料や原材料価格の低下につながりプラスの側面が強いとみられるが、産油国をはじめとする新興国にとっては経済の下押し要因になる。原油など資源価格の低下は、先進国では家計部門の購買力を下支えする方向に働いている。しかし、アジアを中心とする新興国の景気減速は、先進国の企業部門にとっては輸出低迷を通じマイナスに作用する。これまでわが国の景気回復を支えてきた輸出企業は悪影響を受けざるを得ない。

年明けの世界株式市場は北朝鮮による核実験を受け、急落して始まった。混迷の度を深める中東情勢を含め、今年も地政学リスクといった雨雲が内外経済に重くのしかかっている。

４年目に入った安倍政権の経済政策「アベノミクス」は、デフレ脱却が視野に入るなど、一定の評価はされるだろう。内外の経済情勢が波乱含みの展開が予想される今年こそ、その真価が試される。

半面、財政、金融のみならず、政策発動余力は極めて少なくなっている。企業は公的部門に頼ることなく、今こそ先駆的な技術開発やイノベーションに乗り出す意欲が求められているのではないだろうか。

伊豆地区分科会

2015年7月22日開催

今こそ美しい伊豆が世界に輝くチャンス

カギを握る住民の意識変革や交通基盤整備

創造センター核に広域でつながり可能性広げよう

サンフロント21懇話会（代表幹事・岡野光喜スルガ銀行社長）は7月22日、第21回伊豆地区分科会を伊豆の国市のホテルサンバレー富士見で開いた。約120人が参加し、世界文化遺産の富士山や世界遺産に登録された韮山反射炉、世界認定が見込まれる伊豆半島ジオパークなど世界レベルの貴重な地域資源を伊豆全体の活性化につなげる方策を探った。

主催者を代表して北村敏廣静岡新聞社代表取締役専務は「伊豆半島の厳しい現実を踏まえながら、伊豆が世界に輝くための課題や可能性を探っていきたい」とあいさつした。懇話会運営委員長の伊東哲夫伊東法律事務所長は「伊豆創生のツールがそろった。まさに今が旬。産官学が一体となって取り組んでいく時ではないか」と訴えた。

基調講演の講師はNPO法人全国街道交流会議専務理事の古賀方子氏。「街道と地方創生」と題してヒト、モノ、情報が行き来し独特の文化をはぐくんできた街道をてこに地域資源を掘り起こし、それを道でつなぎ直す活動を紹介。「伊豆地域でも美しい伊豆創造センターを中心にそれぞれの特色を生かしながら広域でつながり、可能性を広げていってほしい」と期待を寄せた。

「世界に輝く伊豆の創生」をテーマにしたパネル討論には古賀氏、美しい伊豆創造センター会長の森延彦函南町長、経済性と社会性を両立させる経営などを研究する静岡県立大学の国保祥子講師、伊豆市の老舗旅館「落合楼村上」の村上昇男社長の4氏が登壇し、伊豆創生に向けて住民の意識変革や若者を呼び込むための地元の覚悟、人材の育成などが重要だと述べた。

主催者代表挨拶

静岡新聞社代表取締役専務
北　村　敏　廣

本日のテーマは「世界に輝く伊豆の創生」です。先日はご当地伊豆の国市の韮山反射炉が世界遺産に登録されました。誠におめでとうございます。東部、伊豆地域には２年前に世界遺産となりました富士山の構成遺産を含め、世界に誇る地域資源があります。さらに伊豆半島が世界ジオパークに認定されますと、伊豆半島は世界レベルの地域資源の宝庫となります。世界に誇る地域資源をどう活用し守りながら、自律的で持続的な地域社会の活性化に結び付けていけばいいのか。伊豆半島を取り巻く厳しい現実を踏まえながら、世界に輝くための課題や可能性を探ってまいりたいと思います。

基調講演には地域資源を利活用した地域活性化のカリスマであり、全国街道交流会議専務理事で内閣府地域活性化伝道師の古賀方子さんを福岡県からお迎えしました。パネル討論では伊豆創生を巡っての活発な議論を期待しています。

懇話会は21年目に入りました。このような活動の継続は皆さまのご支援のたまものであり、感謝を申し上げるとともに一段のご協力をお願いいたします。

懇話会代表挨拶

サンフロント21懇話会運営委員長（伊東法律事務所所長）
伊　東　哲　夫

私は沼津生まれ、沼津育ちですが、「地方創生」という言葉は私たち東部、伊豆に与えられたテーマではないかと考えています。恵まれた地域ゆえの不作為の文化や経済を享受してきたのではないでしょうか。創生とは創り、生み、生かすことであり、今まさに創生の時を迎えていると思います。富士山の世界文化遺産登録、そして韮山反射炉が世界遺産となり、伊豆半島の世界ジオパーク認定が間近です。加えて東駿河湾環状道路が完成し、12月には箱根の西麓に日本一の吊り橋がお目見えします。伊豆創世のためのツールが揃いました。「今です　今ではないですか」。この時期こそ旬だと強く感じているところです。

世界に輝く伊豆の実現、伊豆創生は民の力ではどうにもなりませんので、行政の力も借りて官、産、学が一体となって創生、再生を図っていかなければなりません。どうしたらいいのか、本日の分科会では基調講演やパネル討論を通じハード、ソフト両面からのお知恵や課題をお聞きすることができると思います。伊豆創生に向けての大きな糧となるであろうことを期待しています。

基調講演

「街道と地方創生～しずおかの事例から」

NPO法人全国街道交流会議専務理事
講師　古賀方子氏

「道の数だけ日本がある」、金太郎あめではない街道交流

表題には「しずおかの事例から」と付いていますが、しずおかの事例をはさみながらお話をしてまいります。私ども全国街道交流会議発足時の宣言文みたいなものに司馬遼太郎さんの「道の数だけ日本がある」という言葉を使わせていただきました。きっかけは東大阪の司馬遼太郎記念館に行く機会があり、そこで見たビデオの中で司馬さんが「江戸時代には藩ごとのさまざまな文化があって多様な日本がいくつもあったから明治維新が成し遂げられた」というようなことを語っていました。それぞれに道を通じて文化が生まれ、ヒト、モノ、情報の往来が独特の文化を育んできたことに気付き、「道の数だけ日本がある」をコンセプトにしていくことを決めました。ともすれば高速道路など新しい道路が次々とできていく中で、どこも同じようなまちになっていくところをもう一回、街道を梃（てこ）にして地域の資源を掘り起し、また道でつなぎ直してということで活動を始めたのです。もともと何か強固な基盤を持つような広域団体ではありませんでしたから、街道が徐々につながってそれぞれの地域で全国大会などを開いてきました。そうした中で圏域が生まれ、また道でつなぐというようなことを積み重ねてもう10年以上になります。きょうは広域で取り組むことの可能性を伊豆地域７市６町で組織した美しい伊豆創造センターの中でもぜひ広げていただきたいという願いを込め、私どもの活動が何かの参考になればと思ってお話します。

縁の深い伊豆、江戸開府400年で時代行列

全国街道交流会議と伊豆のご縁を少し振り返ってみますと、東京都千代田区が江戸開府400年の事業を行うことになり、お手伝いをすることになりました。お江戸寄合いというコンセプトで企画したのは街道文化が集う時代行列でした。当時市民オペラを試みていた伊東の三浦按針、徳川家康に献上した熱海の湯汲み道中、そして下田街道はハリスの江戸出府行列でした。にわか仕立てで楠山さん（現下田市長）には「もう２度とこんなこと思いつかないでね」と言われてしまいました。また静岡県出身の俳優・加藤剛さんに江戸時代の繁栄と平和をもう一回見直そうという趣旨の宣言をしていただいたと思います。

静岡新聞社の「元気発見団」では日本初洋式帆船400年シンポジウムを一緒にやり、長崎県平戸の事例を関西学院大の教授を招いて、当時はまだ珍しかったヨーロッパから観光客を呼び込む平戸の事例を話していただきました。熱海の家康入湯400年事業にも参画しました。徳川家18代当主恒孝さん、熱海在住の作家杉本苑子さんが入って熱海の文化をこれからどうするかという話をしていただきました。街道の風景をもう一度きちんと見直そうと行った街道研究会の活動は当時の建設省沼津工事事務所さんに協力していただきました。伊豆縦貫道のお手伝いも続けています。下田街道を見直そうと地元と一緒にガイドブックとマップを作りました。あわてていて心残りの個所もあるものですから、これはぜひもっといいものを作ってみたいと考えています。

出発点は長崎街道、地域連携の布石づくりに奔走

私の出発点は長崎県の出島と福岡県北九州市の小倉を結んだ長崎街道です。江戸とつながる脇街道で徳川幕府の海外向けの窓の役割を担った唯一のルートです。そのころ「地域連携」が注目を集め始めていましたので、この歴史的な街道を地域連携の布石にしようと模索し、福岡、佐賀、長崎の3県をつないで民間サイドの長崎街道まちづくり推進協議会を立ち上げました。長崎県は郷土史関係、小倉はまちづくり関係が主力と異色の顔ぶれでした。県が出て来るのはずっと後になってからです。お金はありませんでしたが、明治維新以降、日本の重工業を引っ張ってきた地域ですから経済界には底力があります。組織をうまく動かして推進力にしようと考えました。縁遠かった商工会議所と商工会の連携を図って当時の九州通産局の旗振りで県ごとにシンポジウムを２年開き、郵政民営化途上の郵政局も巻き込みました。その時のキャッチフレーズが「九州の郵便の歴史は長崎街道に始まる」です。明治になると宿場町ごとに郵便局ができて発展していくわけですが、宿場町ごとにポストを作ったり、飛脚リレーをしたりしました。そうこうしているうちに長崎県がオランダとの交流400年事業をやるということで、長崎街道だけでなく平戸と長崎を結ぶオランダ街道を手掛けました。この日蘭交流400年の時に、「全国街道交流会議」と銘打ったフォーラムを開きました。建設省（現国土交通省）など道をつくる側も加わり、既に広域で街道のイベントをやり始めていた中山道とかも集まり、全国街道交流会議という団体が動き出すことになったわけです。建設省は「歴史　道、まち未来ルネッサンス事業」を提唱し、街道には欠かせない歩け歩け運動のウオーキング団体も連携軸に加わるなど骨組みが固まり、地域を巻き込んで課題を解決するための全国大会の開催へと広がっていったわけです。これによっていろんな団体が立ち上がり、街道連携を実現する仕組みが整い、街道文化の掘り起こしが各地で盛んになりました。

第2回は静岡大会、「新街道学のすすめ」がテーマ

全国大会は山口県萩で第１回、２回目は東海道の静岡県富士川町（現富士市）で静岡大会、その後、羽州街道の上山、四国4県を巻き込んだ四国大会、東海北陸自動車道開通に合わせた飛騨高山大会、そして鳥取でも行いました。鳥取は鳥取自動車道が開通すれば衰退が加速するであろう宿場町、街道地域の活性化をどうするかということがテーマでした。鳥取からは三遠南信に取り組む浜松で開き、その後、第１回とは仕掛けを代えてやっと連携が実現した山口、防府、萩という萩往還全体の市が参加しての萩往還山口大会といった流れで来ています。

懐かしい静岡大会での思い出は「新街道学のすすめ」です。静岡県人をはじめ東海道というと江戸から１里とか何番目の宿場というように江戸側から見ることが多いのですが、京都、大阪側から見るとどうだろうかという視点で、江戸と大阪の専門家２人に議論していただきました。飛脚の制度にも公家便というのがあって経済的に困窮していたお公家さんたちの懐が少し潤うようになっていたという話なんかは立ち位置を代えると街道にまつわるいろんな文化が見えてくるという意味で面白かったですね。静岡大会後、地元には様々な動きがありました。下田街道活用推進協議会が立ち上がり、静岡市内の東海道２峠６宿の道の駅活用、国交省が提唱した日本風景街道に呼応した「ぐるり富士山風景街道」などがあり、東名富士川サービスエリアのスマートインター社会実験と一連の動きにも少しはお手伝いができたかなという感じがしています。

交流首長会立ち上げ、次は街道知事会

全国組織ともなるとネットワークの動かし方や信頼関係の構築が欠かせませんが、タテ割りの弊害をなくすことも重要です。バラバラだと本当に困ります。例えば文化庁の「歴史の道調査報告書」を、国交省の外郭団体にお願いしてアーカイブ、資料保存を始めるとか、それぞれに橋を架けることをしています。日本商工会議所には観光専門委員会に街道観光を組み入れていただき、市長会や

町村会との連係、全国道の駅連絡会の事務局がある日本道研究所などとも少しでも街道でつながっていって、街道の活用や活性化がいきわたるようにしたいと努めているところです。

先ほど全然基盤のないところからスタートしたと申し上げましたが、連携の象徴として首長さんに立っていただけると非常に分かりやすくなりますし、それぞれの市町村が色々な交流の中で活性化が始まるということもありますので、第5回の飛騨高山大会の時に街道交流首長会を立ち上げました。今、70人弱の首長さんが参加しています。特に首都圏では中央区とか千代田区といったブランドから板橋や荒川など人口が多いところが参加していますので、地方と首都圏の交流が図れますし、あまり費用を掛けずに互いにＰＲができます。また広域と広域をつなぐ場合に県は欠かせないので街道知事会ができつつあります。

仕込みに2～3年、社会実験とも連動

全国大会に向けてはだいたい２年から３年かけて成果を仕込んでいきます。１、２年通って課題を地元の人と一緒に発掘して、圏域を広げる必要があれば国や県とも話して広域化する仕組みを作ります。羽州街道上山大会では東北地方整備局と話をして６県ごとにリーダーを探そうということで東北６県を回りました。大会では「もはやみちのくは道の奥ではない」と宣言していただきました。飛騨高山の大会では飛騨の匠たちが約1300年前に奈良や京都に向かって歩いた飛騨の匠街道に着目し、高山の街並みだけでなく、匠街道の眺望のいい道にスポットを当てました。その過程で伝統的建築物の街並みの一部にしかお客さんが来ていないことに気付き、入り口を街並みが閑散としている地区からに変え、街並みの周遊も分かりやすくする工夫をしてスムーズに歩けるようにしました。国交省の社会実験を取り入れましたが、外国人客を含め来遊客が大幅に増えました。

鳥取大会の場合は、鳥取自動車道の開通で鳥取、兵庫、岡山の３県にまたがる因幡街道の宿場町が疲弊するという課題に取り組みました。中国山地は山が険しくたどれる谷筋も限られているので、どうしても高速道路や道路、街道が同じ場所を通る、並走することになります。そこで何をやったかといいますと、鳥取自動車道は新直轄で初めての道路で乗り降りが無料ですが、その代り高速道路上にサービスエリアもパーキングエリアも、ガソリンスタンドもありません。その時、国交省の方から「せっかく横に宿場町があるのだから、宿場町がサービスエリアになったらいいじゃないの」とアドバイスをいただきました。入り方が難しかったのですが、これを道の駅の整備計画に盛り込み、幸いにも高速道路上に道の駅の看板が設置できるように標識令が改正されて賑わいをみせています。地元の宿場町側もこれまでバラバラに立っていた案内看板を集合化し色彩も統一するなどして２次誘導を図っています。第９回山口大会の萩往還は日本海と瀬戸内を直線で結ぶ58㌔の街道で、道路が街道を縫うように入っていて歩くには危険な個所がいくつもありました。ここでは「歩く道化」の社会実験をしました。こちらも若い人が集える場所がなく、高齢化が猛スピードで進んでいて「街並みは残っていても人は残らない」といわれてきました。今、小さなビジネスを起こしながら伝統的建築物の街並みを維持していく試みが始まっています。城下町の萩が夏ミカンで有名なのに対して宿場町地区は天然記念物にもなっているユズを活用しようとしています。

日本橋は街道のシンボル、首都圏との交流にも一役

全国街道交流会議を象徴する活動をいくつか紹介します。まずは全国の国道の起点となっている東京中央区の日本橋。東京五輪の時に首都高が日本橋の上に架かってしまい殺風景ではありますが、国道１号の道路原標があり、奥州に延びる国道４号もここからです。私どもの東京事務所も三越の日本橋本店にあるんですよ。地下鉄銀座線と半蔵門線の乗り換え通路にもなっていて一日約４万人が通ります。三越の入店者も同じく４万人。まさに交通の集積地です。ここが拡幅されてきれいになった時、街道展、街道市をやりました。富山県高岡市は北陸新幹線開通に向けてシティセールスを掛けていました。また私どもは発足以来、日本橋の再生運動を担う企業町会に関わっています。日本橋界隈には三井不動産とか野村証券といった企業の本店がたくさんあり、もう45年ぐらい企業町会として「日本橋洗い」を行っています。自分たちで作った企業のマーク入りの法被を着て家

族も参加して橋をごしごし洗ってきれいにするわけです。この時、街道ゆかりの名水を全国各地から集めてＰＲしました。目指すは日本橋文化と街道文化の再生。このように街道を通じて首都圏ともつながっていく取り組みもしています。

静岡と福岡結んだ聖一国師、勢い水を生家から運ぶ

次は地域と地域を結ぶ取り組み例を紹介します。富士山静岡空港の開港前、静岡県から福岡便、鹿児島便を飛ばすに際して交流のネタ探しを依頼されました。鹿児島とはお茶、カツオなどがあり、すぐに静岡、鹿児島両商工会議所のつながりができたのですが、福岡ではそういうものがなかなか見つかりませんでした。本当にありませんでした。電話の利用状況のデータをみても静岡―福岡の通話は極めて少ないんです。どうしようかと思い悩んでいたところ、福岡最大いや日本最大の夏祭りとなり、期間中福岡に350万人が集まる博多祇園山笠は確か静岡市出身のお坊さんが思いついたものだ、ということに気付きました。茶祖といわれる聖一国師です。山笠を担いで走る男衆に沿道からザブンザブンと勢い水を浴びせ掛ける習わしに聖一国師ゆかりの水を使ったらどうだろうかと提案しました。実現しました。静岡市栃沢の聖一国師の生家・米沢家で水をくみ、フジドリームエアラインズに載せ、静岡からの交流団もやってきました。福岡の方からすれば聖一国師は祇園山笠をはじめ、はさみや織物、お饅頭など博多文化の一番大事な人だと思っているわけですから大いに盛り上がり、なおかつ聖一国師ゆかりの寺めぐりなどで静岡の人が来てくれるようになって大変喜んでいます。静岡側はもっと宣伝し、来訪を促したらいいのではないかと思います。

災害に強いまち・道を「歴史防災」に学ぶ

浜松大会の準備中に起きた東日本大震災を機に歴史防災に力を入れるようになりました。大震災の被災状況や復興の様子の展示はもちろん、復興市とか復興商品をアレンジしてデパートのイタリアンレストランで復興カフェを開くなどしてきました。歴史防災とは「街道に学ぶ災害に強いまちづくり道づくり」という意味です。街道には昔の人が国土と戦って道や宿場町を守ってきた歴史があります。稲わらに火を放って津波からの避難を村人に促したことで有名な和歌山県広川町の「稲村の火」がありますし、直近では木曽中山道の土砂・河川災害などが記憶に新しいところですが、そういうところの調査もするようになりました。条件の厳しい国土と戦い地域を守ってきた知恵から学ぶことがたくさんあります。これもまた街道活性化に生かすことができるのではないかとアプローチしているところです。

広がる街道の活用、新たな仕組みも不可欠

街道交流会議の活動も参考になるでしょうから少しお話します。観光関係の団体と日本商工会議所はずいぶん近しくやっていますし、観光委員会も設置されています。そこに街道の視点を加えてもらい、総務省、国土交通省、農水省、さらにはＪＴＢなどもオブザーバーとして入っていただき、事例集めとかをやっています。街道、観光で地域を活性化しようという時には街道のソフト、資料が重要になります。そうしたソフトも使っていくばかりではやがて枯れてしまいます。街道と飛脚、郵便制度との関連は先ほどもお話しましたが、関連する資料が一番豊富なのは幕府の道中奉行から受け継いだ資料を持つ郵政博物館なんです。郵政民営化もあって外に出す機会が少なくなったということでしたので、活用できるようにと全国街道資料ネットワークを設けました。これがあればそれぞれの宿場町にある大小の資料館、博物館のお手伝いができますし、眠っている資料の発掘や活用にもつながります。

近年は街道の活用が従来の健康ウオークから歩く旅へと幅が広がり、フットパスとかロングトレイル、街道歩きというようにいろんな歩き方が全国に起きています。これらを網羅するかたちで把握し、なおかつ道の駅などと結びつけて新たな仕組みづくりを目指しています。今、私どもが事務局となって新日本歩く道紀行100選ということで、フットパスで100ルート、ロングトレイルで100ルートを募集しています、これにより歩く系の団体や国交省の工事事務所などが参加し、街道の新たな視点での見直しや新たな仕組みづくりが図れるのではないかと期待しています。

地域再生と結び付けた街道の見直しに知恵絞る

駆け足になりますが、街道による地域再生の事例を紹介します。飛騨高山では伝統工芸と街並みを結びつけることで街並み博覧祭みたいなものを演出することができました。若狭路では大会の準備段階から社会実験を持ち込み、150㌔以上もサービスエリア、パーキングエリアのない舞鶴若狭自動車道から降りてもらって、インターから300㍍しか離れていない道の駅を拠点に、小浜市が進めている「まちの駅」「海の駅」をセットにした３駅構想に結び付けました。萩往還ではユズの丘の事業組合が立ち上がりました。それから三島商工会議所と会合を始めたばかりですが、三島の持つ「四つ辻」の拠点性を生かした地域おこしもあります。四つ辻とは甲州・富士山への道、江戸への道、京への道、海に向かう下田街道の交差をいいます。横浜市では国道１号の旧宿場町地区を何とかしようと、国道１号の見直しから入ったところです。長崎街道の長崎市では長崎奉行所があった場所に建つ県庁、それから長崎市役所が移転します。周辺のオフィスビルも支店の統廃合などで空きが目立ちます。出島の復元整備と周辺整備に一定の成果が見えましたので、跡地などを高層マンション化の流れに任せるのではなく、少しでも界隈の歴史的風情を残したいという機運が高まっています。私どものような民間が入ることで県、市、国が初めて一緒のテーブルに着き、議論が始まりました。

最新のところではこの７月に京都縦貫自動車道と昨年開通していた舞鶴若狭自動車道がつながり、大きな周回道路となりました。京都市は一大観光地でありながら港を持っていませんでしたので、縦貫道で丹後とつながることをきっかけに海の京都を標榜し、海の京都博覧祭を始めました。京都だけでなく、嶺南と嶺北に分かれていた福井県も均衡のとれた発展に期待を寄せています。これに滋賀県、兵庫県、２つのネクスコ、近畿地方整備局、観光を担務する中部運輸局などが参加していろんな議論をしています。福井県の小浜からサバを運ぶ鯖街道は京都・葵祭りの鯖寿司でよく知られていますが、大陸からの物資を含めた昔からの輸送ルートであり、陸路と琵琶湖や川の舟運の機能を併せ持っていました。ことし海と都をつなぐ往来文化遺産ということで日本遺産に選ばれました。これで地元は大いに盛り上がり、活用推進協議会をつくるなど縦軸はうまく固まってきました。次なる課題は高速道路に交通量が吸収されて衰退が懸念される旧丹後街道、国道27号です。因幡までつながる街道を何とか掘り起こそうと調査に乗り出したところです。

広域の可能性探り一緒に美しい日本創ろう

まとめというわけではありませんが、私どもは街道とか道路を軸にし、うまく新しい道路の開通も活用してということで、タイミングを取りながらやってきているわけですが、広域でやっていくことの可能性をぜひこの伊豆地域でも追求し広げていただきたいと思います。その中心となるのは美しい伊豆創造センターではないかと思いながらいくつかの事例を報告しました。伊豆は首都圏エリアの巨大な周回道路とつながるメリットを持っています。それぞれが美しい地域、文化ある地域を目指しているわけですし、その美しさや文化にもそれぞれ特色があるでしょうから、ぜひその特色を生かしながら広域でつながって地域の可能性を広げるという役割は極めて重要であり、ますます増していると考えます。一緒に美しい日本を創っていきましょう。

＜プロフィール＞

■古賀　方子氏（こが・まさこ）　編集者、プランナーの業務の傍ら長崎街道のまちづくりに取り組み、北部九州地域連携軸構想や長崎県・日蘭交流400年記念事業に携わる。2002年有志で「全国街道交流会議」を設立。同会議には街道や歴史・文化を活用して地域づくりに取り組む自治体、民間団体、個人が参画、各地のまちづくり、みちづくりへの支援や国への政策提言などを行っている。プロデューサーとして「とうほく街道会議」や「飛騨の匠街道推進協議会」、「因幡街道交流会議」等々、地域と共に多くの街道団体を立ち上げ、街道・町並み整備や観光・特産品開発など、さまざまな活動に取り組んでいる。「全国街道交流会議」の特別委員会「街道交流首長会」には、静岡県からは三島市長、下田市長、富士宮市長、静岡市長、藤枝市長、袋井市長、浜松市長が参画している。福岡県出身。

パネル討論「世界に輝く伊豆の創生」

〈パネリスト〉
森　延彦 氏（函南町長、美しい伊豆創造センター会長）
国保　祥子 氏（静岡県立大学経営情報学部　講師）
村上　昇男 氏（落合楼村上　代表取締役社長）
古賀　方子 氏（NPO法人全国街道交流会議専務理事、内閣府地域活性化伝道師）

〈コーディネーター〉
中山　勝 氏（企業経営研究所常務理事）サンフロント21懇話会TESS研究員

◆中山　本日のテーマには副題があります。「観光地としての競争力を高めるための課題と可能性を探る」です。基調講演で古賀さんからも広域でやっていく可能性を探ることが重要との指摘がありました。言い換えれば「伊豆は一つである」ことをもっともっと掘り下げていく必要があるということではないでしょうか。まず伊豆の観光と現状について議論し、伊豆の可能性と具体的な行動について考えていきたいと思います。口火を切っていただく森町長は４月に発足した美しい伊豆創造センターの会長を務められ、ベースとなっている伊豆半島グランドデザインの推進・実現を目指しています。

資源生かせぬ背景に道路体系の脆弱さ
最大の転換期、今こそ絶好のチャンス

◆森　伊豆には13の市町があってそれぞれが独立独歩であります。ブドウの房を例にクラスター状という言い方もありますが、これを日本語に直しますと分散型ということで、かねてから伊豆が一つ一つといわれている構造的な理由ではないかと考えます。文豪・川端康成先生は『伊豆の旅・伊豆序説』に「伊豆半島全体が一つの大きな公園であり、一つの大きな遊歩場である。つまり伊豆半島はいたるところに自然の恵みがあり、美しさの変化がある」と書いています。いうまでもなく伊豆半島は風光明美、気候温暖、温泉、農産物、海産物など様々な形で豊かな自然資源に恵まれていますが、優れたこれらの地域資源が生かされているとは言い難い状況にあります。最大の要因はクルマ社会に対応しきれない道路体系にあると思っています。交通混雑・渋滞で知られ、下田から東名沼津インターまで早くても３時間ぐらいかかっています。加えて大量輸送を担う鉄道とバスのリンクがかなり悪く、駐車場不足や交通の結節点となる要所へのアクセス道路の整備が遅れるなど伊豆半島全体の道路ネットワークはかなり脆弱であり、多くの来訪者を迎えるにはあまりにも社会基盤である道路が弱いと言わざるを得ません。

情報インフラもＬＡＮを含め大変脆弱な状況にあります。多くの地方都市が直面している人口減少、若者の流出、少子高齢化、雇用の場がないなども伊豆半島の大きな課題であり、観光入込客の減少に伴う観光産業の在り方やホテル・旅館の低迷なども挙げることができます。

伊豆縦貫道は伊豆半島の構造を変え、意識変革に欠かすことができないものです。数多くの課題

を負の要因ととらえることなく、関係市町や関係団体の広域連携の不足を補いながらしっかりと連携を結び、立ち向かっていく。最大の転換期を迎えている今こそ絶好のチャンスだと考えます。伊豆を一つに、世界から称賛され続ける地域を目指して伊豆半島グランドデザインを策定し、この4月から実践組織の美しい伊豆創造センターを稼働させました。発足間もないですが、着実に取り組んでいます。ちなみに創造センターのロゴマークはブドウの房をデザイン化したもので、中央を縦に貫く一本線が伊豆縦貫道、横の茎が東名高速ということで、ジオパークには長泉町、清水町が加わっていますので、併せて15の市町が広域連携を図り一丸となって美しい伊豆の創造に努めようという思いを込めています。

◆中山　続いて村上社長にお伺いします。マーケティングの世界には「分からなければお客様に聞け」という言葉があり、観光地伊豆についても同じことがいえるかと思います。ボランツーリズムについても紹介してください。

10年前比でも観光交流人口の回復は約87%
魅力見直し、リピーター・ファンを呼び戻す

◆村上　ご存知かと思いますがあえてご紹介しますと、観光交流人口は伊豆半島で約4千万人、対前年度比103.1%です。うち宿泊客数は1051万6千人、101.1%。県内シェアは57.8%ぐらい。伊豆は伸びているとみられがちですが、平成3年ごろからみるとまだ53%程度の回復です。平成17年、10年前に比べても100%まで回復していません。87%近くまでしか観光交流人口が戻っていないという状況を考えると、伊豆の魅力がなくなったというよりいろんな魅力がたくさん周りにあるということで伊豆に来る機会が減っているのではないでしょうか。まず取り組まなければならないのは自分たちの魅力を見直して作り直すこと、リピーターとかファンをもう一度作り直すこと、感動体験をしていただけるような場所を作り出すことだと思います。

ボランツーリズムはおかげさまで5年間続いております。国の登録有形文化財となっている落合楼村上の文化財をお掃除していただくと宿泊がタダでついてくるイベントです。若者に参加してもらうのですが、文化財を磨くと新鮮な発見があっていとおしく感じるようになります。彼らは自ずと落合楼村上のファンとなり、数年後に宣伝広告マンになってくれます。最初からそこまで狙っていたわけではありませんが、そんな効果が生まれていると感じています。

森町長から情報インフラ、Ｗｉ－Ｆｉのお話がありましたが、インバウンド（訪日）のお客様には必須で、100%必要です。昨年から客室すべてで使えるようにしましたが、海外からのお客様が全室で使い始めたら全く動かなくなるでしょう。これが伊豆半島の真ん中から下（南部）の情報インフラの状況です。このままではインバウンドのお客様の受け入れもままならなくなると懸念しています。インバウンドというと爆買いや団体を連想しがちですが、いろいろな方がいらっしゃいます。日本で会社を立ち上げた中国の観光事業者によりますと、人間ドックやメディカルチェックのために来日する場合、だいたい10日間で費用は80万から100万円。人間ドックを受けた後、結果が出るまでの間は観光などをして過ごし、結果を聞いてから帰国するのだそうです。こういうトラベルマーケットもあります。伊豆半島にも中国人観光客が急激に増えていますし、チャンスであると思っています。

◆中山　国保先生は組織行動論とかソーシャルビジネスが専門分野で、中山間地の滞在型観光などの調査もされています。伊豆地域の価値と課題についてお伺いします。

問題現象の見極めと正確なアプローチが必須
あればうれしい、表層機能にビジネスチャンス

◆国保　私はソーシャルビジネスとその中でどうやって人をマネジメントしているかという視点で研究をしています。全国47都道府県のうち40ぐらいは訪れて事例視察をしていますが、全国の事例からすると伊豆は相当に恵まれています。地域資源や観光資源が豊富で何といっても東京からのアクセスがいい。この後事例として取り上げる島根県の海士町は東京から軽く6時間はかかりますが、国内からたくさんのお客さん、色んな人を呼んでいます。もし伊豆の皆さんが人を呼べないというのなら、それは単にマネジメントやヒトの問題ではないかと思います。

国保　祥子 氏

大事なことは問題と構造です。人口減少や高齢化など山積している問題現象の奥にある構造は何か、本当に解かなければならない根本的な問題は

何かというところの見極めと正確なアプローチが重要になります。皆さんは若者の流出を課題の一つに挙げていますが、大学にいると伊豆出身の若者の地元愛は非常に強くてけっこう帰りたがっています。でも帰っても活躍する場がない、仕事がないから戻りたいけど戻れないといいます。もし若者たちが活躍できる場さえあれば流出は何とかなるのではないかと比較的に楽観視しています。ですから現役世代の皆さまの頑張りで次世代の居場所をぜひ作っていただきたい。

観光産業をサービス業ととらえたとき、サービス業には本質機能と表層機能の２つの側面があるといわれています。本質とは顧客が対価を出すことで当然受け取ると期待しているもの、表層は受け取りとは別にあればあるほどうれしいものを示します。おいしい食事だったり、風光明美な景色・歴史的建造物だったりという本質機能の難しいところは、ある一定度合いの充実度を超えてしまうとそれ以上満足度が上がりません。一方の表層機能は期待していないゆえに満足度が上がるという構造になっています。この2つの機能をきちんと見分け、本質機能を抑えた上でいかに表層機能を提供していくかというフレームで考えることが大事ではないかと思います。

私が行った調査データで示します。サービスに対してアンケートを取りました。観光ツアーに置き換えてもいいのですが、ハイかイイエで尋ねると97％がハイと答えます。次に実はこれお金がかかりますと尋ねるとハイが39％に落ちました。さらにお財布を開いてくださいというと１％ぐらいの方しか開いてくれません。大事なのはこの１％がどこにいて、何を求めているのかを正確に見極めることです。財布を開いてくれなければビジネスになりませんから。

◆中山　古賀さん、基調講演ありがとうございました。外から見た伊豆の魅力や課題についてさらに言及したいことがありますか。

老舗観光地伊豆は“引き算”の発想も一考
インバウンド客にヒストリーツーリズムを

◆古賀　伊豆を訪れたのは約５年ぶり。どちらかというと観光地化されていないところをずっと回っていましたので、駅頭などで観光パンフレットの多さに驚き、やはり伊豆は首都圏に近い観光地だなと改めて認識しました。大会の関係で福井県などに行く機会が多いのですが、数年前に全国大会を開いた富山県は知事さんが東海北陸自動車道プラス北陸新幹線開通を見込んで観光に力を入れました。あっという間に富山の露出が増え、発酵食品が注目されるなど今たくさんのお客さんを集めています。色んな富山の魅力を掘り下げてきた成果だと思います。こういうところが日本海側に続々と出てきています。

ちょっと強引な言い方になりますが、老舗観光地伊豆はないものを増やそうという発想ではなく、引き算を少し考えた方がいいのではないでしょうか。魅力あるものを統合してもっと魅力あるものにブラッシュアップするということです。

現在手掛けているのは伊豆縦貫道や下田街道とも連動していますが、江川邸や江川文庫、韮山反射炉といった歴史資源を一体的に考えるとともに、さらに広域ネットワークができないかということです。会場には江川家ご当主もお見えになっていますが、江川家の人的ネットワークは東京などにも広がっています。また伊豆代官は甲州街道まで管轄し灯台も管理していて、江戸の役所は後に福沢諭吉に譲って慶応義塾の校舎となりました。品川にはお台場があります。江川家の歴史をたどると、保元の乱の関係で奈良・五条からこちらに移ってきました。酒造りの技術を携えてきただろうし、朝廷とのつながりや松尾芭蕉との交友など時代時代の文化人と付き合いがありました。古楽器もいくらか眠っていると聞いていますので、江川邸で演奏会を催すのもいいでしょう。源頼朝ら武将との関連付けもできます。色々浮かんできますが、こうしたものを観光客、とりわけ外国人観光客向けにヒストリーツーリズム、歴史文化観光として提供できないかと思いを巡らせているところです。

◆中山　今の時代は単純な地域資源は素材にすぎず、そこに何か意味付けをして付加価値を付けていかないと観光資源にはならないというお話だと思います。パネリストの皆さまからは伊豆半島の現状と課題についてハード、ソフトの両面からご指摘をいただきました。これらを同時並行で進めるのは困難ですから、優先順位を付けるとすれば何から取り組んでいくかをお聞きします。

人材の確保、育成のシステム・ツールが必要
若者を呼び込むなら地元はそれなりの覚悟を

◆村上　伊豆半島グランドデザインを拝見していて本当に同感しているのは第４章に書いてある人材の確保及び財源の確保ですね。ヒトとお金が非常に重要だと感じています。伊豆半島にはまだまだ隠れた魅力があり生かし切れていないとしたら、それを発掘するのはやはりヒトです。我々サービスに携わるものがお客さまを感動させるのもヒトでしょう。ヒトを教育していくシステム、ツール

が必要だと思います。落合楼村上を始めて13年、教訓として生かそうと決めたのは人材育成です。ことしは３名を新卒採用し、和のコンシェルジェという表現をしながら教育を第一次的に優先して育てています。優先順位はまず人材の教育ではないでしょうか。

◆中山　国保先生は伊豆がその魅力をうまく生かし切れていないのはヒトのマネジメントが足りないのではないかと指摘されています。どうしたらいいかを含め好事例を紹介していただけますか。参考になると思いますので。

◆国保　優先順位で挙げれば若者の活躍の場づくりと、それに密接に関係する仕事づくりだと思います。

島根県海士町は人口2400人ほどの離島です。町財政は破たんの危機にあり、人口は減少の一途で20代前半が極めて少ないという状況にありました。だいたい高校を卒業して地元に就職できなければ進学なり就職で外に出ていきます。ところが海士町では地元高校の教育レベルに見切りをつけた教育熱心な親が子供を島外に進学させるため、島に戻ってこないというサイクルに陥っていました。島には産業を支える若者・人材がほとんど残っていませんから、そこで育つ小中学生は産業と向き合う若者を見ることがなくなり、自分が産業を支えたり作ったりする立場になろうとは思わなくなります。そこで海士町の皆さんはこうした問題が再生産される構造を崩そうと考えました。

足りない人材は外から呼び込むしかありません。３つのことをやりました。東京の大学講師と周りの若い学生を町に呼ぶ。そして高校の教育レベルを上げるための魅力化プロジェクト、また有期雇用制度を活用しＵ、Ｉターンを主に島外から若者を連れて来ました。20代前後の若者が外から入ってきたことでどんなことが起こったかというと、まず地元の小中高生がロールモデルを見る機会が増え自分の将来の可能性を広く持つようになり、さらに島にいて面白い人たちに出会う機会を得たことで島に残って何かをやりたいという意識が生まれてきました。県立高校の生徒数も増えてきました。子供たちが地元を見直したことで親の意識も変わってきたのです。町役場の職員は町民の意識を変えるしか生き残る道はないというところまで追いつめられていて、もう外から人を連れて来るしかなかったといいます。外からといっても定住促進ではなく、刺激として使うことを意識して取り組んだそうです。自分たちの給与カットにも踏み込み、地域が連帯して打開策を探る流れができたなどと話していました。

何を言いたいかというと、若者を呼ぶために必要なのは地元の人たちの覚悟だということです。若者はその地に来てほしいといわれても、消費されることに対しては意外と敏感です。利用され、活用され、後はポイという感じではなく、本気かどうか地元の人の覚悟をよく見ています。外から若者を呼んでくる施策を考えているのであれば、それなりの覚悟が必要になります。

◆中山　古賀さんも街道交流会議の全国大会をやって来られた中で、地域の活性化を進めるための覚悟があったのではないかと推察します。美しい伊豆創造センターはどんな覚悟をしてどんなことをしていったらいいでしょうか。

中山　勝氏

3本柱に橋を架け、美しい伊豆を創り出そう
解決のベースは道路、住民の意識変革が急務

◆古賀　美しい伊豆創造センターについては九州にほとんど情報が流れてきませんのでにわか勉強をしてきたところですが、道路とジオと観光の３つの部会に分かれて議論を深めてきたかと思います。私はジオと道路と観光にどうやって橋を架けるか、３つは当然つながっている話ですからどういう工夫をするのかというところに創造センターが力を発揮できる根源があると考えます。

観光や社会基盤整備に不可欠と伊豆縦貫道完成を最優先に据える考え方が当然あるでしょうけれど、道路から望める美しい景観を提供するスポットをうまく活用したり、ジオパークを歩くジオロードを作ったりして、ともすればバラバラに考えそうなところに橋を架けて美しい伊豆を演出・創造していく方策があると思います。食べ物も含めて伊豆の美しいを極めていくような戦略が重要だと考えます。

参考に申し上げますと、九州も20年来九州は一つと叫ばれながら一つ一つでした。道州制を巡る議論もあって九州知事会は観光でつながるしかないと九州観光推進機構を作りました。最初に手掛けたのは従来型の観光と地域づくりではなく、九州に眠っている蘊蓄（うんちく）探しです。蘊蓄の旅シリーズという冊子が４冊にもなりました。観光をルート化するといっても地元の受け皿とか質の問題があるので全部とはいきませんが、県境

を越えてルートを設けるわけですから、九州は一つの大きな基礎になりました。

◆中山　一つ一つを一つにすることは大変な作業です。森町長、それでもやはり地元としては優先順位みたいなものがあるのでしょうか。

◆森　伊豆縦貫自動車道が生む時差効果は非常に貴重なものです。函南まで開通したおかげで伊豆市、伊豆の国市を含め観光入込客が4割増えたそうです。そして圏央道と東名がつながったことで関東圏ナンバーの車がたくさん来るようになりました。伊豆縦貫道を骨格として半島全体の道路ネットワークを整備することが極めて重要だと思います。まち、ヒト、モノ、情報の交流のベースは道路です。これができることによって多くの課題が解決されることでしょう。

森　延彦 氏

道の駅等交通結節点のネットワーク化では、国土交通省の全国重点道の駅ネットワークに複数の市町にまたがる伊豆地区の8駅が設定されました。単にネットワーク化されたというだけでなく、これを利用して情報ネットワークができました。スマホで旬の情報が入手できます。有事の場合は防災拠点にもなりますから道の駅ネットワークを拡充してインフラを整えた中でソフトを考えていきたいと思っています。情報関連ではＮＴＴ西日本などが創造センターの活動を機に協力体制を組む意向を示してくれています。

グランドデザインといいますと超長期的、広域的なプランと理解されますが、伊豆半島グランドデザインの場合は約3年の短期、約5年の中期、約10年の長期という見定めをして、できることからをモットーに進めていきます。例えば観光協会は長い歴史を持ち、それぞれ独立独歩で経営してきましたが、統合によりさらなる相乗効果を発揮できるだろうということで27年度は3団体、28年度は伊豆観光推進協議会、ジオパーク推進協議会を統合し一元化した創造センターの運営を目指します。

いずれにしても課題は山積しています。伊豆縦貫道をはじめ地域構造の変革と行政団体、地域住民を巻き込んだ意識改革が極めて大切です。先ほども申し上げましたが、今がチャンスであり積極的に取り組みたい。中でも観光は関係者と十分な協議を進め、効率的な観光施設の拡充ができればと思っています。

◆中山　ひしひしと覚悟が伝わってくるお話をいただきました。創造センター任せではなく、地域住民、観光関連の方もやらなくちゃの覚悟が求められているように思います。村上さんはどのように創造センターに関わっていきたいと考えていますか。

入湯税引き上げで景観保全などの財源確保
学生は「使える存在」だが、最後は当事者

◆村上　我々旅館の仲間内で一つのアイデアが出ています。創造センターが提唱する美しい伊豆を作るためには例えば廃墟をどう撤去していくのか、景観をどう守っていくのか、やはりお金が必要です。財源確保のため入湯税を上げたらどうかという案です。現在お客様から150円いただいていますが、50円上げたらどうか。全国一律150円ではなく既に3都市が上げています。一番高いのが100円アップの釧路市で250円、三重県桑名市は210円、岡山県美作市は200円となっています。7市6町同時の必要はありませんが、入湯税は地方税ですのでそれぞれに条例改正が求められます。湯ヶ島の旅館組合で試算したところ、50円アップで年間だいたい600万円から1千万円の財源が確保できます。修善寺の組合の試算でも1千万から2千万円以上の財源確保となるそうです。

村上　昇男 氏

お客様に受け入れてもらうためには美しい伊豆を作るために50円アップさせてくださいと、目的を明確にそして素直に伝えることが大事かと思います。現状では入湯税を払っている意識すらない方がたくさんいらっしゃいますから。

◆中山　国保先生は人材の重要性を強調されていますが、伊豆において必要とされるスキルや役割についてどのように考えますか。

◆国保　お答えする前に、問題の解決策を探るフューチャーセンターの取り組みを紹介させてください。2週間に1度、地域の人と学生が一緒に問題の解決策を考えています。その中から商店街の活性化イベントの企画や観光ツアー、学生と企業のコラボによる商品開発などが生まれています。

実践を通じて感じるのは、学生はお手伝いはできるけれど最終的に問題の解決策は地元の当事者が考えるしかないということです。そのためには地元の方が考え続けることができる仕組み、情報やヒトが定期的に集まる仕組みが重要になります。そこから生まれたアイデアにはいいものもあるけれど失敗もたくさんあります。質のいいプロジェクトやアイデアを生むためにはやはり量が必要です。あれやこれやいっぱい出て来た中で一つ二つすごくいいものが出て来るという構造を持ち、持続性を担保していくことが課題の一つかと思います。よく情報と創造性は相反するといわれます。情報があればいいアイデアが出て来るのではなくて、情報のないヒトが考えた方が創造性を使わざるを得ないので、むしろいいアイデアが出て来るということです。学生は情報がない分、創造性を発揮してくれる存在です。地域の問題解決策のお手伝いという立場として「非常に使える存在だ」と感じています。

◆中山　古賀さんは九州観光推進機構や阿蘇の地域デザインセンターとかをよくご存じだと思いますが、参考になるようなことはありませんか。

伊豆が育んだ旅館の主と文豪との交流を日本遺産に
まちづくりはヒトづくり、ヒトが動けばまちは変わる

◆古賀　九州はこのところ手掛けていないので、他の事例から具体的に提案させてください。何年かぶりでフジドリームエアラインズに乗りました。聖一国師の縁や県人会の発足などで交流が始まっているためかほぼ満席でした。行き来が広がっているなと感じました。九州で若い人に話を聞くと、サーファー、波乗りをする人たちが九州にはいいポイントがないといいます。フジドリームエアラインズを使って伊豆の温泉だけでなく波乗りにも来てもらう。そんなキャンペーンを福岡でもっとされたらいかがでしょう。実は福岡空港は佐賀県人もよく使っています。佐賀空港は少し辺ぴなところにあるものですから。

下田街道を歩く道、自転車の道として活用しましょう。さらに伊豆の老舗旅館の主たちと文豪との交流や愛した景観をまとめ上げて日本遺産を目指す。日本遺産は色んな省庁の予算を集めて整備していくという話ですから、東京五輪までに100カ所ぐらいはできるでしょう。ぜひチャレンジしていただきたい。

◆中山　確かにモノではなくコト文化も重要ですね。美しい伊豆創造センターの役割はますます重くなっています。森町長に締めくくりをお願いします。

◆森　伊豆は一つ一つから伊豆は一つにするためには共通のビジョンが不可欠です。伊豆半島グランドデザインは実践を前提とした４つの戦略を掲げています。伊豆の固有性、アイデンテティを顕在化させて他地域との差別化を図り、競争力を高めて勝ち抜かなければなりません。意識の変革が欠かせないのです。私はまちづくりはヒトづくり、人材とリーダーの育成だと思っています。ヒトがヒトを動かしてまちは変わっていきます。地域づくりも同様です。創造センターがその機能を担えればと考えています。始動の段階では首長はもとより関係機関、有識者、国、県、地域の皆さんと絆を深めて、機運の醸成に努めることが肝心です。「実践なきところに伊豆の創生なし」の気概を持って取り組んでいきます。８月１日付で伊豆駐在の副知事になると伺っております土屋優行賀茂振興局長もお見えになっていますが、県もしっかりと力を入れている証です。絶好の機運到来であり、頑張ってまいります。

◆中山　土屋さん、森町長からもご紹介がありました。お話をいただければと思います。

次の世代につなげてこその意識改革
ここでやらなきゃ次は巡って来ない

◆土屋　４月の赴任前に知事に呼ばれ、「伊豆の出身（下田）だから行って伊豆をどうにかしなさい」と言われました。その時に「意識を変えるには２、３年は掛かります」と答えたことを覚えています。意識を変えるというのは単に皆の意識が変わったよということではなく、実践をしたうえで成功した、良くなった、これならいけるだろうと次の世代までつなげる形ができないと意識改革にはならないと思っています。伊豆にはいろんな魅力があります。今まで言葉だけだったものが実際に現場に行ってみていろんな魅力があることを実感しています。８月から伊豆半島担当の副知事となりますが、皆様方のお知恵を拝借しながら７市６町の皆様方と一緒になってこの地域をさらに良くしたいと思っています。私は今が最大のチャンスだと思います。ここでやらなければ次のチャンスはなかなか巡って来ないかもしれません。一緒になって頑張りましょう。

◆中山　伊豆は一つ、伊豆の中心核って何だという話の中で、よく例えに出て来るのがタマネギです。中心はどこだと皮をむいていくと最終的にちょっと芯になった部分が残ります。これが核かというと実はそうじゃない。タマネギは一つ一つの皮が集まって実際には一つになっています。伊豆は一つ一つといっていたその皮の部分が全部くっ

ついている芯、つまり下で支えているのが実は美しい伊豆創造センターであるという気概で取り組んでいただければ、ベクトルも一つの方向に向かい、世界に輝く伊豆の創生ができると思っています。

〈プロフィール〉

◇パネリスト

■森　延彦　氏（もり・のぶひこ）　東京農大卒。1969年静岡県庁入庁。総務部参事を経て2007年、函南町副町長。10年4月函南町長に就任、現在2期目。シンガポール、キャンベラなど海外主要都市をはじめ、国内外の都市計画に詳しく、「静岡県の都市計画」「アーバンデザイン　ヨーロッパの事例」など著書・論文は多数。「美しい伊豆創造センター」は伊豆半島7市6町の首長会議が伊豆の将来像・活性化策を示した「伊豆半島グランドデザイン」を推進する組織。そのトップとして重責を担う。函南町出身。68歳。

■国保　祥子　氏（こくぼ・あきこ）　専門は組織マネジメント。IT企業で社会人経験を積んだ後、慶應ビジネススクールでMBA及び博士号を取得。主に地域活性化活動のような経済性と社会性を両立させる経営を研究する。また実践面ではラーニング・コミュニティを使った意識変革や行動変容、問題解決を得意分野とし、2011年に地域の社会人と学生がともに地域の課題を検討するコミュニティ「フューチャーセンター」を、2014年には育休をキャリアアップの機会にする「育休プチMBA勉強会」を立ち上げる。

■村上　昇男　氏（むらかみ・のりお）　大学卒業後、POSシステムなどを開発・製造する大手メーカーに勤務。結婚を機に伊東市の名門旅館の経営に従事する。2002年旧天城湯ヶ島町の老舗旅館で5棟が国の有形文化財に登録されている旧落合楼を継承し、再生。施設内の小水力発電施設も再稼働させた。文化財の清掃作業の対価として参加者が宿泊できる「ボランツーリズム」を導入するなど、地域の歴史や文化を守り、伝えながら中長期的な視点で旅館経営にあたる。長泉町出身。50歳。

◇コーディネーター

■中山　勝　氏（なかやま・まさる）　慶大大学院経営管理研究科修了。スルガ銀行入行後、企業経営研究所出向。主席研究員を経て2000年より部長、08年5月から常務理事。静岡県、沼津市、三島市などの委員や日大国際関係学部非常勤講師などを務める。サンフロント21懇話会TESS研究員。静岡県出身。

第21回　東部地区分科会のお知らせ

●日　時　2016年2月18日（木）　13:30～

●会　場　プラサ・ヴェルデ（沼津市大手町1－1－4）

TEL.055－920－4100

●テーマ　人と動物が共生できる社会の実現を目指して

〈基調講演〉エリザベス・オリバー 氏

NPO法人アニマルレフュージ関西（通称・ARK・アーク）代表

〈パネルディスカッション〉

※パネリスト

エリザベス・オリバー 氏

菊池　豊 氏（伊豆市長）

川口　綾 氏（静岡県補助犬協会理事長）

※コーディネーター

大石　人士 氏（一般財団法人静岡経済研究所常務理事）

エリザベス・オリバー氏の略歴

英国生まれ。大学は農学部。酪農コースを専攻した。「好奇心」から1968年に来日。大阪府北部の能勢町の古農家を入手し、英語教師をしながら馬、犬、猫などと暮らしていた。やがて不要物として捨てられるペットや家のない動物たちの惨状を知り、1990年にアークを設立。その際、ビジョンとして掲げた『助けを必要とする動物を救出し、安住できる家庭に迎えられる日まで、食事、住まい、医療などできる限りのケアを提供し。精いっぱいの愛情を注ぐ』は現在も不変。1995年の阪神淡路大震災後、1年間で600匹を超える被災地から来た動物に対応した。1999年、NPO団体となり、2008年英国王立動物会員として日本で初めて認定される。2012年には日本での長年の動物愛護への貢献を認められ、英国エリザベス女王より大英帝国五等勲章を叙勲。現在、大阪のほか、兵庫・篠山で動物保護施設を運営。東京にも連絡事務所を置いている。著書多数。近著に「日本の犬猫は幸せか　動物保護施設アークの25年」（集英社新書・2015年10月発行）がある。